

162
1041

開日清
戰清
三骨
不昏
煎刃
血
碎

道人著

東京
扶桑堂發行

日清戦滑稽劔舞の序

今や日清兵を交へ陸に海に戦へ必

らず日本大勝利を博す是に於てか人

心自から活潑となり到る處に鞭聲肅

々を吟じ衣肝に至るを演舞す而して

比演舞たる勇は則ち勇ありと雖も餘

りゴツくに過て面白味少し況んや

日清戦滑稽劔舞



愉快極る酒席ふどにては夫が爲め樸
り合ひ組討等の種を時く事往々にし
て之あるに於てをや道人此に感ずる
處あり一種快絶なる劔舞法を發明す
是れ蓋も徒らに人をしてお臍に茶を
沸し留飲を下さしむるのみに非す又
頤を外し腹を減さしむるのみに非す

之を大にしては天地乾坤を感動せし
めテハ大變だが凡る滑稽の神髓は諷
世諷俗に在てケラく笑ひコロく
轉げる中に自から云ふに云ふ可から
ざる奇妙奇手烈變報來の活氣を含蓄
すればあり諸君請ふ吟ぜよ諸君請ふ
踊れよ諸君が吟じ且つ踊るに伴て此

書も益々能く賣れば書肆の主人も亦
 たケラく笑ひユロく轉けて雀踊
 しツ、弗函万歳を唱へんのみ

時に明治廿七年第八月下旬

骨皮道人識

日清開戦
 滑稽劍舞

第一例

○花曇

日曜骨休聊有閑
 此時天氣餘程怪

欲爲遊步出玄關
 恰似姑之朝起顔

○第一句 日曜の骨体み聊か閑あり

最初先づ胡坐をかき、其傍へスアツキ又は短き竹に
 ても木にても手頃の物を一本置べし、夫より日
 曜の下吟ずるに及んでア、腕がたるいと云ふ
 思ひ入れにて、左の手をグツト伸し、骨休みト云
 ふ時に右の手で其腕を撫で、又た右の腕を伸し
 て左の手で撫で、聊か開ありト少しく身体を反して



左右の手を思ひ切り上へ伸し、ワンダリ口を開て欠
 伸を爲し、左も退屈らしい様子を爲す、
 ○第二句 遊歩を爲さんと欲つして玄關に
 出づ
 遊歩を爲さんと
 びよこりと立て、
 急に衣紋を繕ひ、
 欲してト傍に置
 たるスアツキを
 取て、左の小脇に



抱へ込み、玄關に出づト肩を怒らかして前へ二三歩進む

○第三句 此時の天氣餘程怪しく

此時の天氣ト少し身体を屈め、右の手を額へ當て空を眺め、餘程怪しくト前後左右等色々に見廻し



ながら、雨が降はせぬかと思ふやうな素振を爲す、

○第四句 恰も似たり姑の朝起顔

恰も似たりト再び元の坐へ立戻つてステツキを傍へ置きつゝ立膝を爲し、姑の朝起き顔ト傍へ置たるステツキを左の手に取て長煙管に挿し、右の手で煙草をつぐ真似を爲し、之を眞脂下りに咬へて、何だか氣色の悪さうな瘡に障るやうな、妙痴奇々な顔をして終とす、但し此處の可笑味が第一なり



第二例

○打拂韓兵

朝鮮未脱野蠻風

万事万端乱脈窮

お負螳螂斧三昧

飛而入火夏之蟲

○第一句 朝鮮未だ脱せず野蠻の風

朝鮮未だ脱せず野蠻の風ト天窓に大きな青葉帽子

又は三斗笠にても被り、兩袖を前へ遣り手と手を袖

の中拱ゆきて其近所を無茶苦茶にノソリくと

○第二句 万事万端乱脈窮る

万事万端乱脈窮るト政治が不行届きで人民が亂暴

をする心持にて、拳骨を振廻したり足で蹴飛したり、

總て喧嘩掴み合の体を爲す、

○第三句 お負に螳螂の斧三昧

お負に螳螂の斧三昧ト中腰になつて左の足を一步

前へ踏出し手に鐵砲を持って覗ひを付る体を爲す

○第四句 飛で火に入る夏の蟲

飛で火に入る夏の蟲ト躊躇んで左右の手を袂の中

へ入れ兩方へ突張りて蟲の羽のやうに爲し、ヒヨソ

くくど其處を飛廻りて仕舞にコロリと轉ゆる、
 是は虫が燈火を取に來て却ッて焼死んだ体なり、

第三例

○祇園晩歸

身似大星遊興時
 仲居相送赤前垂
 醉來倒臥鴨川岸
 遙憶當年水雜炊

○第一句 身は大星遊興の時に似たり
 手拭にて大きな男鬻を拵へて之を頭へ縛りつけ、右
 の手に扇子を一本持ち身は大星遊興の時に似たり

ト彼の由良之助が忠臣藏の茶屋場で大浮れに浮れ
 て居る体にて、口
 に謠を唄つて居
 る体を爲し足元
 をヒヨロくさ
 せ、扇を半開きに
 して左の手の掌
 をパチく叩きながら、無茶苦茶に其居廻を歩く、



○第二句 仲居相送る赤前垂れ
 手に持たる扇を捨て、襟を後へ送つて兩方の肩まで

丸出しにし、仲居相送る。赤前垂ト右の袖にて口を蔽
 ひ左の手にてグ
 ット褌を取り、少
 し反身になつて
 茶屋の女を氣取
 り、是も無茶苦茶
 に其邊を歩く、成
 べく嫌味マツアリを宜しとす

○第三句 醉來倒れ臥す鴨川の岸
 再び第三句の醉拂ひに立戻り、扇を脇差のやうに差



して、醉來倒れ臥す鴨川の岸ト矢張りへッレケに酔
 拂つて居る心持
 にて、右の手を頬
 透へ押付け、何や
 らん小唄でも謡
 つて居る様子に
 て、足元をヒヨロ
 くさせて其邊を宜
 き程に歩き、鴨川
 の岸ト云ふ時
 にドゥリと其處へ
 倒れて大の字形に
 寝る、

○第四句 遙かに懐ふ當年の水難炊



遙かに懐ふトムツクと起上つて胡坐を掻き、左の手
 を張臂にて膝の處へ突
 き、當年のト右の手を伸
 して指で年を繰る体を
 爲し腕捲りをしながら
 オット立て、水雜炊ト兩
 方の手を左の肩へ遣り
 兩足とくの字形に折て
 右の足を一步前へ出、脊
 中に脊負たる彼の九太



夫をボカキと川の中へ脊負投に投り込だ体を爲す
 但し此處は自分が投り込まれてグマリと、土左衛門
 になつた生似をするも宜し、

第四例

○豊嶋之海戦

豚尾元來無着茶。不知強弱賣喧嘩。
 豈圖軍艦食分捕。濟遠逃清廣乙牙。

○第一句 豚尾元來無着茶

先づ頭へ袋にても被り、之に襷又の其他の長き紐を

縛りつけて後へダラリとぶら下り、兩方の袂を袖口より中へ入れて筒袖を造り、最し有合すならば着物の上から袖無俗に云ふチャンくを着れば猶宜し夫より豚尾元來無着茶ト口に燕のやうな譚の分らない出放題をベチヤクチャくど饒舌りながら、右の手を額にかざし妙痴奇な顔をして向ふを眺める、

○第二句 強弱を知らず喧嘩を賣る

強弱を知らず喧嘩を賣るト無暗に空威張に臂を張り又は拳骨を振廻すなどし果は鉄砲を以ドンく

くと打て向ふ体を爲す

○第三句 豈圖らんや軍艦分捕を食ひ

豈に圖らんや軍艦ト鉄砲を投り出し降參の白旗を無茶苦茶に振廻し、又は手を合して拜む真似を爲し、分捕を食ひト兩方の肩を怒らして威張つ、彼の操江号に乗組の大將其他を縛捕る体を爲す

○第四句 濟遠は清に逃げ廣乙の牙

濟遠は清に逃げト兩手を開いて之を一本の如く一ツ處へ寄せ、スット頭の上まで伸して蒸氣の煙突の如く爲し、口でシニウくくくと云ひながら左

の方へ駈て行き、魔乙は牙と今度も同じく右の体にて
 て右の方へ駈て行く是は濟遠号が清國へ逃歸り、廣
 乙号が牙山へ向ひて逃た處の体なり、

第五例

○歳晚

手携帳面勢如鯨

勘定促來甲乙兄

米屋叩門薪屋裏

双方云譯只平々

○第一句 手に帳面を携へて勢ひ鯨の如く
 此詩を演ずるには、先づ尻を端折て腕捲りを爲し、肩

を怒らかして右の手に古新聞又は其他の品にても、
 見計ひにて通ひ
 帳に擬して携さ
 へ、手に帳面を携
 へて勢ひ鯨の如
 く、下無暗に威張
 た様子にて、其邊
 を宜き程に歩く、

○第二句

勘定促し來る甲乙の兄

帳面を其處へ投り出し、兩膝を突て



中腰に成り、張臂にて左の手を膝に突き、右の手を伸して人差指で疊を叩き立て、甲乙の兄ト一旦右を向て右の通り催促をする態を爲し、又た左を向て同様の態を爲す、取も直さず二人の男が来て左から嚴處責立る様子を爲すべし、



○第三句 米屋は門を叩き薪屋は裏米屋の門を叩きと再び立て矢張り肩を怒らし二三

歩進んで、右の手を上て門口を叩く真似を爲し、薪屋は裏ト又たクルリと二三歩跡へ戻りて、今度も右同様裏口を叩く態を爲す、

○第四句 双方の云譚只

平々

今度は借金取に責られて誠に當感したと云ふ思ひ入れにて、双方の云譚只平々ト其處へヒタリと坐り、右の手を上て頭の腦天を掻きながら、右を向てヒヨコくお



辞儀を爲し、又左を向てヒヨコくとも辞儀を爲す

第六例

○成歡之快戰

成歡打敗夜明辰
此戰軍功誰第一
松崎大尉是其人
百万清兵潰走頻

○第一句 成歡打ち敗る夜明の辰

成歡打敗る夜明の辰ト馬に跨りたる心持にて左の手に手綱を執り右の手にサアベル振廻して号令を掛る態を爲し夫より鉄砲を構へてズドンくくと敵を打つ勢ひにて段々前に進む

○第二句 百万の清兵逃出す頻りなり

百万の清兵ト彼のちやん坊主の弱虫が此奴ア迎も叶はぬと鉄砲も軍旗も其處へ皆な投出して、ウロくマゴく途方に暮たる様子をして爲し、逃出す頻りなりト轉びつ起つしなから命辛々一生懸命に逃るの態を爲す

○第三句 此戦ひの軍功は誰か第一

此時又た第一句の馬に乗たる大將に立戻り、此戦ひの軍功は誰か第一ト左の手に手綱を持ち右の手を額にかざしつゝ、少し反身になつて向ふを左から右

の方へどオツト見まわす、
 ○第四句 松崎大尉是其人
 松崎大尉ト右の手にサアベルを振上げて部下の兵卒
 に号令を掛ながら、彼の安城渡を泳ぎ渡る態を爲し
 是其人ト洋刀を勢ひよく左右上下に振廻して敵中
 へ亂入する体を爲す、

第七例

○恐雷

小生一体小膽生

摺味噌音聞吃驚

夕立時交怒雷的

戸棚暗處忽籠城

○第一句 小生は一体

小膽の生れ

小生お一体小膽の生れト

ちやんと坐つて、ハテ雷で

はないかどピク／＼しな

がら兩方の耳を指にてホ

チクリ又腕組をして考る

○第二句 味噌を摺音

も聞て吃驚



味○増○を○摺○る○音○も○ト立膝になり兩手を伸して味噌を
 する生似を爲し開て吃驚ト兩方の耳を塞いで後へ
 引線返り、コロコロと其邊を轉げる

○第三句

夕立忽ち
 交怒雷的
 夕立トズツト
 立て兩手を廣
 て上へあげ、口
 でザーア



と云ひながら斜に二三度あろして夕立の降る態を
 爲し、時に交ゆ怒雷的ト尻を端折り鉢巻を爲し、(此鉢
 巻雷の角の様に拵へれば最も宜し)兩手で上下の太
 鼓を叩く体を爲し、口でコロコロトンンンン
 と云ひながら、其處等四邊を無茶苦茶に駈摺り暴れ
 廻る、

○第四句 戸棚暗き處忽ち籠城

戸棚暗き處トあはたしく戸棚を明る態を爲し、忽
 ち籠城ト兩方の耳を塞ぎ身体を丸く團子のやうに
 縮めてコロコロと其處へ飛轉ぶ

第八例

○牙山之勝利

清兵閉口滅茶姿 軍器銃丸打棄馳

帝國豪雄何快絶 牙山殆埋日章旗

○第一句 清兵閉口滅茶の姿

清兵閉口滅茶の姿トぐたり倒れて死んで居る者も
あり、或ひのヤット四ノ道になつて這出す者もあり、
或ひの手を合して命請をする者もあるなど、彼のチ
ヤン坊主が滅茶に負て弱ツて居る状を爲

す、

○第二句 軍器銃丸打棄て馳

軍器銃丸ト肩に擔ひで居る鐵砲を投り出し、又た腰
に付て居る丸をも投り出し、打棄て馳すト一生懸命
に轉びつ起つしなから逃出す態を爲す、

○第三句 帝國の豪雄何ぞ快絶なる

日本の豪雄何ぞ快絶なるト腰にささむ日本刀を
抜き放つて敵陣へ進み入り敵將の首を刎る態を爲
す、

○第四句 牙山殆んど埋む日章旗

牙山殆んど埋むト兩手を額にかざしつゝ少し腰を
屈めて遙か向ふなる山の上を見上る態を爲し日章
旗トピツくり驚いた体にてトシントと後へ尻餅を
突く

第九例

○譯大津繪節

親父々々汝暫俟 其金不殘可出此
與市兵衛聞仰天 否々非決持金子

唯是輕女親切賜 一塊握飯有之耳

請君晴疑免此場 我者一足お先至

定九間之大立腹 忽拔大刀胸間刺

可憐七轉八倒苦 親父爲金終果死

○第一句 親父々々汝暫俟て
尻を端折て腕捲りを爲し手拭を長くしきて之を
ニツに四分六に折り折たる處を左の方の帯に狭ん
で大小に擬し親父々々汝暫俟てト左の手にて

帯に狭みたる手
 拭の長き方の先
 を握み右の手に
 て短き方の先を
 握み肩を怒らし
 反身になつて大
 股に威張て五六歩あるき跡から與市兵衛を追掛て
 行く態を爲す、
 ○第二句 其金残らず此に出す可し
 其金残らず右の手を伸して物を奪ふ態を爲し此



に出す可しト再び大小の柄に手をかけ、オツト反身
 に爲て威張る、
 ○第三句 與市兵衛は聞て仰天
 與市兵衛ト大小に擬した
 る手拭を取て右の手に杖
 の如く長く突き腰を曲げ
 左の手に拳を作りて後へ
 廻し腰の上に置トボく
 と二三歩あるき聞て仰天
 ト一寸後へ振返り見て膽



を潰した顔をして、杖を投出しドマリと其處へ尻餅
を突く、

○第四句 否々決して金

子を持つに非

否々決してト左の手を後

へ突き右の手を伸して横

に振り金子を持ち非ザト

両手で胸の邊りを確乎も

さへて首肯を振る

○第五句 唯是れ輕女



親切の賜

唯是れ輕女ト手拭を二ツ

に折て一寸天窗へ横に載

せ右の袖にて口を蔽ひ但

し嫌味タツプリ親切の賜

ト両手を廣げて掌を上

額の向ふへ出し少し頭を

下て物を受る態を爲す

○第六句 一塊の振り飯これ有る耳

一塊の振り飯ト両手にて結飯を拵へる眞似を爲し



之れ有る耳ト左の手を下へおろし右の手にて胸の
 邊りを指さす、

○第七句 請ふ君疑ひ
 を晴して此場を免せ
 請ふ君トお辞儀をして疑
 ひを晴してト右の手を横
 に振り此場を免せト手を
 合して拜む、
 ○第八句 我は一足お
 先へ至らん



我は一足トザつと立て脊伸を爲し、左の手に拳骨を
 こしらへて腰の邊りをニツニツ叩き、先へ至らん
 ト再び手拭を取て杖
 と爲し、腰を屈てトボ
 くど二三歩あるく、
 ○第九句 定九之
 を聞て大に立腹
 定九之を聞てト又た
 手拭を元の通り大小
 の如くにし、大に立腹



ト腕捲りをして大小の柄へ両手をかけ右の足を一歩前へトシと踏出して、ズツト反身になつて此野郎と云はぬ計りに威張る、

○第十句 忽ち大刀を抜て胸間を刺す 忽ち大刀を抜てト左の手に持て居る柄を右の手に持替てズツト抜き、胸間を刺すト與市兵衛の横ッ腹を突通す態を爲す、

○第十一句 憫むべし七轉八倒の苦み 憫むべしトどたりと其處へ打倒れ、ア、痛い〜と云ながら、七轉八倒の苦みト手足共にドタバタ〜と

させて其處等あたりを無茶苦茶に暴れ廻る、

○第十二句 親父金の爲に途に死を果す

親父金の爲めにト半身だけ起返りて眼を剝出し齒を食しばり成るべく妙痴奇態な顔を爲し、兩方の手に銭の形をゑしらへて胸の邊りへ見せ、向ふの顔と



錢を幾度も見比べる態を爲し、遂に死を果すトザつと立て幽霊



の眞以をして終る、但し此處の可笑味肝要なり
(以下圖を畧す)

第十例

○加藤清正

文録年間豪傑魁 嬰兒啼止亦尤哉
幼時握彼鉄鎚手 遂打朝鮮八道來

○第一句 文禄年間豪傑の魁

是は何人も知つて居る加藤清正なれば其扮装は之を演ずる人々に於て思ひく工夫するも亦た面白かるべし、而して扮装の出来たる後、文禄年間豪傑の魁ト馬に跨りたる心持にて少し反身になり、左の手に手綱を執り、右の小腕に例の長い鎗をかひ込

み、向ふを白眼つゝ、左も勢ひよく前の方へ三四歩進み出る、

○第二句 嬰兒の啼止むも赤尤もなる哉

嬰兒の啼止むとだゞツ子のやうに足を前へ投げ出して坐り、大きな口をワングリ開て兩手を眼に當て

り、泣きながら向ふを見て、吃驚したる

体にて急に涙を拂ひ、全く泣き止たるの態を爲す

○第三句 幼時彼の鉄鎚を握るの手

幼時彼の鉄鎚を握るの手と鎚を執て鍛冶屋の向ふ

打を爲す態を爲す、

打を爲す態を爲す、

○第四句 遂に朝鮮八道を打ち來る

遂に朝鮮八道を打ち來るト鎚を二三度振廻しズツト

頭上へ振かぶり、勢ひ宜く上より下へと打おろす

第十一例

○揮毫

揮毫被頼乍迷惑 鐵面書來滅着茶

童子傍在評得妙 是如蚯蚓是如蛇

○第一句 揮毫頼まれて迷惑乍ら

手拭を廣げて紙の如く丸く巻き、是に扇子又ハ煙管

にても筆に代用すべき物を添て其處に置き、揮毫頼
まれてト書家の心持にて卷たる手拭を取て膝の前
へ横に置き、之をズツと展して上下を眺め位地を取
る思ひ入れにて、迷惑ながらト右の手に一寸墨を摺
る眞以を爲す、

○第二句 鉄面書し來る 減着茶
鉄面書し來るト左の手にて手拭の下を押へ、右の手
に扇子を取て筆のやうに持ち、一寸墨を附る眞似を
爲し、夫より減着茶ト云ふとき、臂を張て左も上手
らしくスラ／＼と書て、二ツ三ツボン／＼／＼

と點を打つ眞似を爲す、

○第三句 童子傍に在り評し得て妙なり
夫より横の方へ坐り直して兩手を膝の傍へ突き、童
子傍らに在り評し得て妙なりト此一句を吟じ終る
まで、始終前の書た物に向ひ、縦から見たり横から見
たり首を出したり引込たり、種々様々な顔をして眺
める、

○第四句 是の蚯蚓の如く是の蛇の如し
是の蚯蚓の如くト右の手の人差指にて右の方を一
寸突き、扇子を取て蚯蚓の這ふ態を爲し、是の蛇の如

し。ト又た左の方を一寸指さし、手拭をグイとしさき
て長く爲し蛇のノマリ出した態を爲る、

第十一例

○雪院偶成

小便之海糞之山。

見下眼前暫樂閑。

静考借金言譯策。

桶間映出閻魔顔。

○第一句

小便の海糞の山

最初ハ極真面目腐ッて坐つて居て、小便の海ト兩手
を伸して水の流れる態を爲し、糞の山トザつと立て

兩手を頭の上まで伸し山の形ちを作る、

○第二句

眼前に見下して暫く閑を樂む

眼前に見下してト少しく下を向き、兩方の手を下て
着物の兩前襦を取り、クルリと尻を捲り暫く閑を樂
むト躊躇んで兩手を前のきんかくしへ掛る狀を爲
す、

○第三句

静に考ふ借金言譯の策

静かに考ふト兩手を頬邊へ押つけ、借金言譯の策ト
腕を組で首を捻ぬりいろく物を考へるの狀を爲
す、

○第四句 桶間映じ出す閻魔の顔
 桶間映じ出すト腕組をした儘眞赤な顔をしていき
 み閻魔の顔ト成たけ可笑な妙な顔をする、

第十三例

○歳暮急作

未堀門松穴 先聞煤掃音 釜随賃餅走
 豆入福茶沈 年内無餘日 世間多借金
 空々待正月 却羨子供心
 ○第一句 未だ門松の穴を堀ザト尻を端折て立ち

腕捲りを爲し、鋏を持って穴を掘る態を爲す、

○第二句 先づ煤掃の音を聞くト躊躇で疊を叩く
 眞似を爲し、又た立て方々を拂煤てパタ／＼と打拂
 ふ態を爲す、

○第三句 釜の賃餅に随つて走りト兩手を伸して
 一寸大きな釜の形を作り、餅を搗眞似をして夫より
 右の手を右の肩へ擔ぎ、左の手をブラ／＼振て左も

重い物を擔ひだらしく、少し腰を屈めて二三歩ある
 く、
 ○第四句 豆の福茶に入て沈むト兩手にて首を抱

へ、足を締め丸くなつてコロリと其處へ寐轉び、福茶
 の中へ豆の沈んだ態を爲す、
 ○第五句 年内餘日無くと起返つて胡坐をかき、右
 の手の指で物を算へる態を爲す、
 ○第六句 世間借金多しと口を尖かし右の手で壺
 を叩き立て、借金取が來た態を爲す、
 ○第七句 空々として正月を待と腕組をじてワッ
 シ口を開き大欠伸を爲す、
 ○第八句 却て羨む子供的心と子供が手に翫弄物
 を持て、餘念なく遊んで居る處の態を爲す、

第十四例

○送友人之行女郎買

誰道元來息子堅 潜披細見慰徒然
 一盃忽起無分別 五町先登有頂天
 未向傾城出新手 護逢藝者打非舉
 二階從古嫌生醉 行矣莫爲廊下寫
 ○第一句 誰か道ふ元來息子堅しととさきちんと風
 面目らしく四角張て、只眼玉をパチクリくさせて

坐ッて居る、

○第二句 潜に細見を披ひて徒然を感むト左の手に本を持ち、右の手の指に睡して頸に之を披ひて見る体を爲し、左も野呂間らしく種々に首を振廻し、又涎の腮の下に流れるを両手で拭取などの真似を爲す、

○第三句 一盃忽ち起す無分別ト手酌で二三杯引掛る態を爲し、メツト立て衣紋を作る、

○第四句 五町先づ登る有頂天トすたこらヨイヤサと駈出して、其邊を無茶苦茶に駈摺廻り、有頂天ト

二階の階子段を登る真似を爲す、

○第五句 未だ傾城に向つて新手を出さずト其處へグタリと坐り、指を咬へて斜眼に女郎の顔を見ながら、イヤにでれくする、

○第六句 設に藝者に逢て非拳を打つト腕捲りを爲し、肩を怒かして左の手を膝の上に突き、右の手を伸して藤八拳を打つ態を爲す、

○第七句 二階古へ従り生酔を嫌ふト立て左右の手に拳骨を拵へて内懐ろへ入れ、胸の上あたりをズツト突揚て、ヒコロくくど千鳥足をして酔ッ拂

ひの眞似を爲す、
 ○第八句 行矣廊下驚と爲る莫れト此處が餘程六
 ケ敷處なり、先づ行矣ト云ふ時に腕捲りをして少
 し反身になり、左の手を左の帯の處へかけ、右の手を
 スット伸して手もなく兵隊に號令を掛る態を爲し
 廊下驚にト兩手を袖の中へ入れて、臂で兩袖を中か
 ら突張り、之を驚の羽を廣げたるに擬して、身体を前
 の方へ屈めツ、びよんくと二三度大股に飛び、爲
 る莫れトちやんと坐ツて其様な事を仕てはならぬ
 と云ふ思ひ入れにて、右の手を廣げて左右に振る、

骨皮道人曰く、劔舞だの演舞だのと云ツたから
 とて、別段六ヶ敷ものには非ず、又た別に一定の
 法則あるものにも非ず、詰り其詩の意味を能く
 得會さへすれば、誰にでも造作なく出来るもの
 なり、殊に滑稽に至ツては只面白可笑く他人が
 見て一時臍の皮を捻さへすれば夫で宜しきな
 り、故に解釋と踊り方の先づ此位にして置き、跡
 の古今の面白き狂詩を記して、諸君が滑稽踊を
 爲さるゝの材料に供す、

◎古詩之部

○觀圍碁

日待庚申待。寄逢偶打碁。漸覺四

目殺。未知二間飛。下手橫好忘飯

時。助言被謂責合危。思案仕盡下

石號。堰耶劫耶濛無知。

○福嶋中佐

烏拉山雲蒙古風。万里遠征孤劍雄

偉業人驚海內外。英名轟渡五洲中。

途從獨逸出露國。名馬購求命凱旋。

凱旋名空途中斃。悲別武夫淚漣々。

再還舊都獲烏拉。一鞭馳去歐亞間。

高山大澤自由越。西比廣原前途艱。

恰是炎暑際夏日。流汗徹背人馬疲。

空原漠々憩無樹。艱難辛苦日追隨。

鷄卵凌飢難求肉。山村僻邑宿無家。

前途	感染	或投	即知	一條	忽失	晝臥	羊風
從此	無患	惡疫	往手	架空	賴綱	夜行	先生
猶萬	惠藥	流行	途不	電信	迷且	何限	襲來
里。	劑。	行地。	誤。	線。	惑。	狀。	甚。
滿天	金錢	又泊	安心	橫斷	纒觀	道案	客夢
風雪	與去	餓葶	擊鞭	東西	星斗	內逃	不結
到嚴	施善	泣餓	馬過	比利	按地	暗中	致曉
冬。	根。	村。	。	阿。	圖。	孤。	鴉。

是這	一種	歡迎	僻境	恩賜	有志	唯待	一望
偉人	有說	猶別	接命	會拜	計畫	無事	無涯
信松	天象	同鄉	何以	金圓	歡迎	歸朝	銀世
本。	閣。	士。	答。	重。	事。	日。	界。
姓呼	紀念	飛檄	聖恩	勅命	新聞	壯遊	步々
福嶋	欲衝	頻募	優渥	新任	傳賞	或賜	忽沒
名安	富山	詩歌	可銘	中佐	賞意	日本	馬蹄
正。	雲。	文。	肝。	官。	氣豪	刀。	蹤。

空前絶後游壯絶。姓名今日世界鳴。
 嗚呼惜命澆季世。嗚呼文官愛錢暗。
 黑辰。不惜生命君獨在。貔貅百万。
 第一人。

○兒島高德

朝權衰而奈高時。輕蔑天子流隱岐。
 兒島高德義氣壯。欲奪龍駕變其姿。
 行在固嚴不得志。竊題櫻樹十字詩。

當年忠誠薰千古。芳名不朽無形碑。
 君不見明治上流社會人。遇太平世
 遊戲頻。精神漫留豈啻櫻。名臭落
 花狼藉春。

○婢女行

遠國這出望奉公。來京不知西又東。
 獨有千本伯母在。賴之有附請狀窮。
 百文荷擔筭用外。一枚布子葛籠中。

飯休四條河原上。	鯉長梅幸孰上手。	尾上梅幸狐忠信。	取兮投兮危々思。	翌日與媿復連立。	祇園清水兩門跡。	律義一片入主氣。	布子萌黃若松鶴。
孰感風流京繁華。	今度狂言銘々箱。	中村鯉長鮓屋娘。	斬兮撲兮慄々寒。	音聞芝居今初看。	愛宕大佛三條橋。	藪入三日名所遠。	袖口端掛茜草紅。

從是每朝手水起。	八文白粉試塗面。	麥飯雜炊久不食。	煙草吞習酒少宛。	口謂不好鳴笑止。	滅多偃伏金相丞。	八寸長簪脚籠甲。	新裁染分晒前垂。
心欲洗落在所沙。	五兩梅花初登頭。	偶逢茶粥已爲憂。	一坐附逢相應劬。	鼻唄道行國太夫。	無性張出燈籠鬢。	真鍮耳搔今不新。	半分桔梗半分鼠。

中有小川英子紋。常穿板屐絲鼻緒。
 近所有男字忠七。少宛無心依之恃。
 時見線出行處何。二條新地御靈裏。
 二百席代三百酒。酒罷今宵有談論。
 談論山々多是鍵。底而忠七給出奔。
 近頃能從小錢回。他行縮緬平生紬。
 縮緬紬子最易着。青梅三留身不柔。
 君不聞在所親父長困窮。如何潛上。

驕此極。試問給銀知何程。半季所
 取三十日。

○聞友人連女郎逃内々有此寄
 聞君段々不身持。評判近來甚不宜。
 遂盜女郎遠出奔。夜中俄尋行衛追。
 弓張提灯六尺棒。多少追手曉未歸。
 分草穿索無手掛。占之方角總相違。
 女郎猶是年季長。如奈親方大難儀。

親方遙推察
 一家一門大騷動
 相談跡之祭
 若氣之至氣毒事
 終是浪々日蔭者
 面皮外聞不頓着
 何處裏店持世帶
 九尺二間住雖狹
 縱談內濟爭承知
 相談何人不擧眉
 今更如何及是非
 兄弟義絕親久離
 長對世間缺面皮
 起証誓詞互無疑
 真實始喜添遂時
 兩人一所暮應嬉

異見縱是理當然
 戀事元來思案外
 只願從是浮名立
 君不見於染久松道
 稱杜若 又不見阿花
 路考愁 歎泣切落
 大白痴 大馬鹿者
 道行心中若御望
 何及此場得切緣
 勘當先刻覺悟前
 小歌四竹世上傳
 行幕 需事開山
 花半七心中場
 古來無限淨氣
 大切之命皆忘却
 縱令死猶入並木

櫻田新狂言之作

○和尚行

極樂橋下蓮花水
門前松古玄關深
內有老僧年八十
古狸兀長人所怕
億昔出家七歲時
食傷何厭精進固

極樂橋上一個寺
庫裏人稀常香起
眉垂齒拔腹無毛
辨舌如流學亦豪
無念無想為坊主
九族生天親類愉

誰知追付破五戒

只見當分纏三衣

時習御經禁飲酒

常凝念佛不殺蟲

芝居角力看何益

花見納涼亦不行

石部金吉雖難碎

女犯肉食奈易傾

君不見月有村雲花

有嵐人間萬

事物無全

未聞坊主死作佛

唯見薯蕷生變縵

始悟鰻之勝於佛

滑分粘分看經休

手巾蒲燒香穿鼻

天蓋櫻養旨鳴喉
 只是當時摩訶多
 年年將殖寄檀那
 祠堂利足又足奢
 已置仲居爲呼家
 走兮土鼎八方明
 無主無親又無兄
 石弩豺狼此地稀
 又識近來扈從少
 摩訶在寺勝手賑
 檀那施物雖輕少
 新橋之邊構妾宅
 床兮違棚二階廣
 有酒有肴又有婦
 堅者石弩怖者狼
 極樂世界知何處

未來成佛強願非
 旨物宵食善可急
 日夜朝暮無人構
 去年立華摧作薪
 更無異見染骨身
 佛元凡夫粹根源
 不許葷酒入山門
 ○宇治懷古
 只先極樂後地獄
 獨憐佛壇御本尊
 先日茶湯腐生子
 早別師匠感恩厚
 念西和尚嘗自言
 內証藥体表立石

憶昔治承夏。源平大喧嘩。追々指
 東走。大津掛問家。宮騎輕尻睡。
 供粉人足飛。兵交何賴少。腹減難
 振威。昨夜園城寺。今朝平等院。
 隔川水掛論。此時暫止戰。忠綱元
 何者。皆言河太郎。入水驅軍兵。
 登岨招味方。賴政何大股。不覺退
 半町。揃鉢撰屑多。欲戰顔色青。

啄歌本非慰。擴扇不爲風。搔斬十
 文字。五尺體生中。英魂爲螢去。
 猶照繩手通。

○病中作

今年時候大層狂。彼岸已過猶見霜。
 夫故病人殊外多。舶來風邪又々昌。
 余亦平生爲虛弱。忽食卷添就干床。
 最初極平氣平左。不飲一服葛根湯。

其中段々容體重
 頭痛烈敷氣分惡
 於是无據出手紙
 棒庵取脈又眺舌
 且日別非心配症
 乍併風是万病基
 此時貫藥水與粉
 其味誠以變挺來
 卵酒療治迎難防
 惡寒漸去熱又強
 賴來藪唐棒庵坊
 象牙小槌叩胸長
 經一兩日必復常
 可成用心勿風當
 晝夜六回自有量
 一度每飲舌欲荒

斯事一週雖少快
 牛乳一合僅繫命
 扱々病氣不合割
 お負藥禮診察料
 食物不勸顔色蒼
 恰如居殘只益槍
 休家業而出錢忙
 差引勘定損一方

◎律之部

○忠臣藏初段目

當社造營全事終
 萬民如草太平風

新田乍敵清和末。足利將軍尊氏公。

奉納誰爭五枚冑。代參共仰八幡宮。

只緣桃井能堪忍。師直運強還御中。

○同 二段目

管領屋形馳走儀。判官使者入來時。

娘傳口上胸頻踊。母押脊中癢未披。

短慮何思與方歎。誓言難背主人詞。

本藏心底則如此。切落椽先松一枝。

○同 三段目

古歌添削暗推量。忽見喧嘩及刃傷。

何處更追師直詰。無端却被本藏妨。

眉間薄手仇難報。存外過言恨未忘。

時有勘平誤耽色。遙聞騷動暮途方。

○同 四段目

檢使悠悠切腹場。判官覺悟已尋常。

無紋請看最期式。羽織莫嘲當世長。

不獨御臺迫悲歎

並居諸士共愁傷

只應早渡屋敷去

何用更迎討手防

○同 五段目

擬向提灯借火行

忽逢朋輩兩方驚

石碑料為亡君重

合羽裙凌大雨輕

強慾白浪街通働

老人暗夜最期情

非猪却打眼前敵

天使用金與勤平

○同 六段目

三十可憐成不成

勤平切腹若何情

賣身長使女房苦

殺舅誰言天道明

金為石碑難用立

疵非鉄炮始疑晴

應知武運未全尽

連判新加一味名

○同 七段目

相逢先問趣錄倉

連判憑誰加寺岡

非色却談身受事

有聲難捕手鳴方

雜炊自食鴨川水

藝子爭塗淨土光

出手何妨還戴足。主君逮夜未曾忘。

○同 八段目

浮世誰言飛鳥川。淵翻成瀨々成淵。

大津未泊土山雨。薩埵猶迷富士烟。

浪々住家聳何在。遙々旅路母爲連。

上京但使祝言整。行末那違妹脊緣。

○同 九段目

漸窮覺悟殺娘遲。未練猶思聳力彌。

靜棒三方阿石出。遙吹尺八本藏窺。
何圖小浪祝言日。即是天星發足時。
欲識消行此身果。庭前雪積五輪姿。

○同 十段目

義平守義復誰疑。遮莫我身及難儀。
暫叱女房書去狀。又防捕手上身持。
芳松尙慕阿園乳。了竹元來是藪醫。
別有伊吾後生樂。夜中混雜不曾知。

○同 十一段目

相圖呼子夜方闌 亂入何人不遺肝

後陣遙道先手勇 大槌却並半弓團

力傳形見討師直 首達本懷備判官

是亦久敷君代例 義臣之譽此書殘

○名代部屋排悶

看花偶泊吉原春 爲客却歎苦界身

引四座敷揚內藝 晝三名代出振新

入床空喚居眼禿 飲水誰憐醉醒人

退屈待君々不見 只聞廊下足音頻

○神拜曲

百拜神前求利生 嚴々鰐口對燈明

先祈家內安全處 應守息災延命情

武運何唯願長久 子孫兼又望繁榮

信心不似欲心重 纔是三文御捻輕

○書吉原細見後

嶋原新町太夫高

全盛何如此里驩

四手朝歸數百挺

猪牙夜泊幾千艘

柳遮制札衣紋坂

花映常燈水道尻

三面堀深一方口

竟無人盜女郎逃

○楠公

父子勤王討逆師

憐他忠義事皆違

恨留二代四條畷

淚灑千秋七字碑

斷然決死軍門出

明白梓弓絕命詞

獨開國史空慷慨

不競南風菊水旗

○田園雜興

身苦仙人與俗遙

住馴田舍亦非寥

夢安寐酒三杯夜

氣爽煎茶一椀朝

擔糞隣翁正直話

舐飴守子自由謠

世間水掛論何劇

不踰前川一板橋

○聽淨瑠璃

一場騷動起賣身

財布分明証據新

立腹還金同志士

愁傷述恨女房親

思猪擊倒非猪客

疑敵詰懸討敵人

誤認刀瘕為銃殺

檢査粗漏失忠臣

○郡司大尉短艇遭難

飛行海上海軍株

大尉自期大丈夫

荒浪朝浸乘組手

潮風夕拂郡司鬚

文人社會多詩作

繪草紙塵看畫圖

豈料第三番艇變

十餘溺死憫成堯

○議員

解散一聲無闇懼

周章狼狽懸支度

他愁氣配伺機嫌

自鳴慰勞為待遇

愈々說初撰舉儀

追々求出投票數

誰人若起競爭心

送賄施方思反趣

○夏夜偶成

錢湯洗熱汗初乾

團扇追螢遊水邊

滿月既輝明似晝

大陽漸沒日如年

家々撒散蚤除粉。戸々立昇蚊遣煙。
 燈映翠簾涼可掬。聲々呼客賣水塵。
 ○觀朝顏。與鴉俱起至斯鄉。
 入谷朝顏聽頗昌。亂菊牡丹獅子狂。
 珊瑚空色薄紅絞。主夫有慾脹錢囊。
 花是無心牽客足。暑不成間歸路忙。
 纔奢一鉢換茶代。○暖味書畫店。

辨口慙勲賣附時。旨將贗作欲人欺。
 額當壁上程宜掛。幅自箱中鄭重披。
 五岳印章殊可怪。三州落款亦多疑。
 其他總是難油斷。入店須先唾濕眉。
 ○出開帳。開帳出迎人足繁。
 猫携半玉老婆孫。御旗流先講中翻。
 太鼓音連題目響。如是我聞解脫恩。
 一天四海皆歸妙。

利益奈何難請合。

坊三財布有餘吞。

○隅田春

寒暖得中花盛天。

猫兮杓子集隅田。

爲夫込合竹爺渡。

因是賑敷梅若邊。

言問云何問言客。

白髯語故捻髯仙。

皆及終日盡愉快。

所謂命之洗濯全。

○時事

改進自由又國民。

楚歌四面仰天頻。

如今開化文明士。

其昔穰夷鎖港人。

出双切盛前果斷。

小刀手際後因循。

超然看板持堪否。

竊怪絕無驚鬼神。

◎絕句之部

○咏煙草

艱難辛苦粉其身。

煙草生涯恰似人。

可憫昔之箱入亦。

今爲お袋奈顏皺。

○題待合茶屋壁

主人閉口女將軍。內幕魂丹云不云。別段何雖無怖物。平生障癩只其筋。

○失題

被復召揚月給株。空爲腕組考前途。小兒不識頻相問。今日矢張日曜乎。

○漢學又吹芽

日本人元利口生。卅年未立此文明。

西洋最早皆吞込。復聞學而第一聲。

○太閤記十段目志林泉

決死從親光義節。堪憐初菊惜生別。祝言盃是出陣盃。來世良緣斯世結。

○春雨

春雨纖々欲暮時。可憐少女爪彈姿。黃鸞是妾梅花主。低調唱來春雨詞。

○貧乏

爲斯貧乏果何年。 迤不當成二頃田。
 未納地租缺資格。 既占互角飲僵權。
 ○青樓聽子規。 忽聞時鳥興如何。
 醒日青樓半夜過。 不似華魁空淚多。
 爲思振僅一聲計。 欲爲膝枕喚權君。
 ○夏夜即事。 團扇手持道拂蚊。
 月明天地無限夜。 只看風鈴短册雲。

○源義仲。 木曾山上舉源旗。 直向王城席卷來。
 ○祇園懷古。 朝日將軍威赫赫。 却看天日没西陲。
 祇園揚屋二階中。 憶昔由良大盡通。
 無復長文。 軒端空掛釣燈籠。
 ○玉藻前。 忽放光明玉藻膚。 禁中逃出隱那須。

誰知三國傳來物。

白面金毛九尾狐。

○代手紙

先日暑中爲御尋。

遠方能々預來臨。

莫尤返禮猶延引。

空背本懷拙者心。

○其二

折角光臨餘早々。

途中及暮定如何。

欲尋其後無人處。

痛入丁寧御細書。

○題駱駝圖

駱駝評判近來頻。

錦繪却勝役者新。

異國畜生何足怪。

世間無限背虫人。

○浮瀨即興

清水之歸醉浮瀨。

怡逢藝者名弘會。

春深早着結城偏。

汗出猶々縮緬蓋。

○着京

遠越山科渡堀川。

却勝小浪上京年。

祇園清水智恩院。

金閣豈無拜見傳。

○望大門口

衣紋坂曲大門開

兩側青簾相對出

○夢

冀成見得久尋思

火照行燈知妄想

○お職

郭中無處不繁華

土手東連至北廻

遊山一片水邊來

夢擲黃金覺後疑

分明富札立錐時

お職毛氈新造斜

茶屋挑燈傳蠟燭

○淺草觀音

矢大臣門淺草濱

晚來豆散鳩如雪

○夢伐歐羅巴

天兵十萬伐西洲

結了迂儒平日志

○不寐

三絃散滿五丁家

數株寒木自生春

飛入本堂不恐人

斬尽紅髯綠眼頭

半宵春夢取全歐

殘燈已滅鼠縱橫。

宙々聲非一正聲。

叩壘數回追不去。

通霄嚙障到天明。

○福島中佐

遠征武勇氏爲初。

年代記中可大書。

誰謂單騎元損氣。

金錢難買此名譽。

○春曉

鳥啼孝々夜明時。

空氣新鮮心地宜。

個是他入云事也。

寐坊拙者不知之。

○賀友人之轉宅

足下蝸牛御再來。

身輕轉宅歲何回。

若教孟母在今世。

正是競爭相手哉。

○偶作

狂詩中絕兩三年。

平仄皆無忘不便。

半日苦辛漸一首。

手間潰損起燒眠。

○秋江夜泊

紅楓滿岸風飄葉。

閑坐孤篷獨酒接。

借問船頭顏氏子。

○題小遣帳

貧乏馴身不遣錢。

于然塵積為山譬。

○觀芝居

草鞋穿處引長裙。

貧乏乍悲身著錦。

○四月三日作

泊舟終夜不移錨。

可成儉約計安全。

月末高殆仰天。

庭與坐敷更不分。

天窓上計雪粉々。

神武天皇祭日天。

偶休職業命如延。

人云上野今花盛。

殘念嗟吾無酒錢。

○客舍

晴雨全知憤鼻香。

逗留幾月帶微黃。

一朝平虱楠公策。

密命下婢灑熱湯。

○丁稚

可憐每日鷄鳴起。

門外撒來盪又水。

且的順盛額附疊。

番公命重尻催痔。

○寄新撰議員某

年俸非嘘八百圓。競爭結果大名然。

唯君此後不如默。禍福元來在口先。

○書画會

兩國中村書画會。不拘晴雨御來臨。

先生席上皆揮筆。帳面頻忙取納金。

○長井兵助

看板太刀正面飾。兵助居合立三方。

人々待得今將拔。齒入齒磨口上長。

○八百善

八百善名譽海東。年中仕出太平風。

此家欲識鹽梅妙。請見數編料理通。

○銘酒店

店先阿姊前垂赤。一本携壘呈御客。

忽地素奔栓拔時。沸騰青酒吹泡白。

○春遊

忽地素奔栓拔時。沸騰青酒吹泡白。

回首花之雲幾重

梵音一杵夕陽春

醉來耳遠難聲分

上野鐘耶淺草鐘

○休日

一家朝起喜何如

疾走れ三雇宿車

今日休尤書入有

男行角力女芝居

○老人嘆

遠是耳兮近是眸

老無色氣懶于遊

聲枯齒落如秋野

滿月然光有禿頭

○題鹿谷會合圖

來會同心一味朋

宴酣談熟膝方崩

誰知瓶子坐間仆

已作陰謀漏出徵

○撰舉雜咏

彼我互爭被撰權

人民群集役場前

開緘期迫相場上

一紙投票價幾圓

○其二

紳士元來不識羞

競名爭利友為仇

一方金力一方腕。天下人心腐敗秋。

○寄自稱壯士

拳骨生風何謂強。貴君粗暴足招殃。

請看一瞬傷人手。被錮鐵窓年月長。

○愉快後作

被加拳骨忽消魂。漸跨敷居我宅門。

借問千金何所得。唯殘二腕爪之痕。

○顔見世

柿色素袍花道長。舞臺鎮返暫之場。

請看荒事氏神樣。日本市川團十郎。

○送友人

兩親氣質尙難量。况復女房家附娘。

能思肝腎辛抱處。三合不曾持粉糠。

○咏櫻

八重櫻出奈良都。折向唐人欲撫鬚。

莫言四百餘州廣。如此名花一本無。

○題朝妻舟圖

朝妻舟靜物思顏。

仇矣仇波寄復還。

又日不知誰與契。

偽多恥我鳥籠山。

○京都偶成

新地之花島原柳。

京都見物一年間。

狂詩誰復成相手。

銅脈先生去不還。

◎五言絕句之部

○題火見櫓

半鐘吊梯子。

鐵棒映提灯。

町内役人外。

決而不可登。

○中元

此品乍輕少。

中元述祝儀。

書餘委細事。

猶待拜顏時。

○春草

雨霽山如笑。

田家社鼓聲。

池邊萌嫩草。

○歲晚

難備新衣服。
樂春兒折指。

○元旦

難逾關漸越。
年改懷中舊。

○途上所見

春色又多情。

未償舊借金。
苦暮父傷心。

猶存前夜心。
元日未無金。

雜沓繁華地。

金春耶又柳。

○偶感

費消多額銀。
不足投票數。

○壯士

手振廻洋杖。
平生無用客。

擦違意氣風。

留目衆人中。

家產爲成塵。
可憐失敗人。

口吹散大螺。
此節買人多。

○日永

扱々無聊事

權妻非所及

○某生歸國之後以書報無事

賦之以代返書

尊書忝拜見無事御歸由

大慶奉存候一詩代貴酬

開口觀滑稽劍舞終

明治廿七年九月十日印刷
明治廿七年九月十三日發行

版權所有

發行兼印刷者 町田宗七

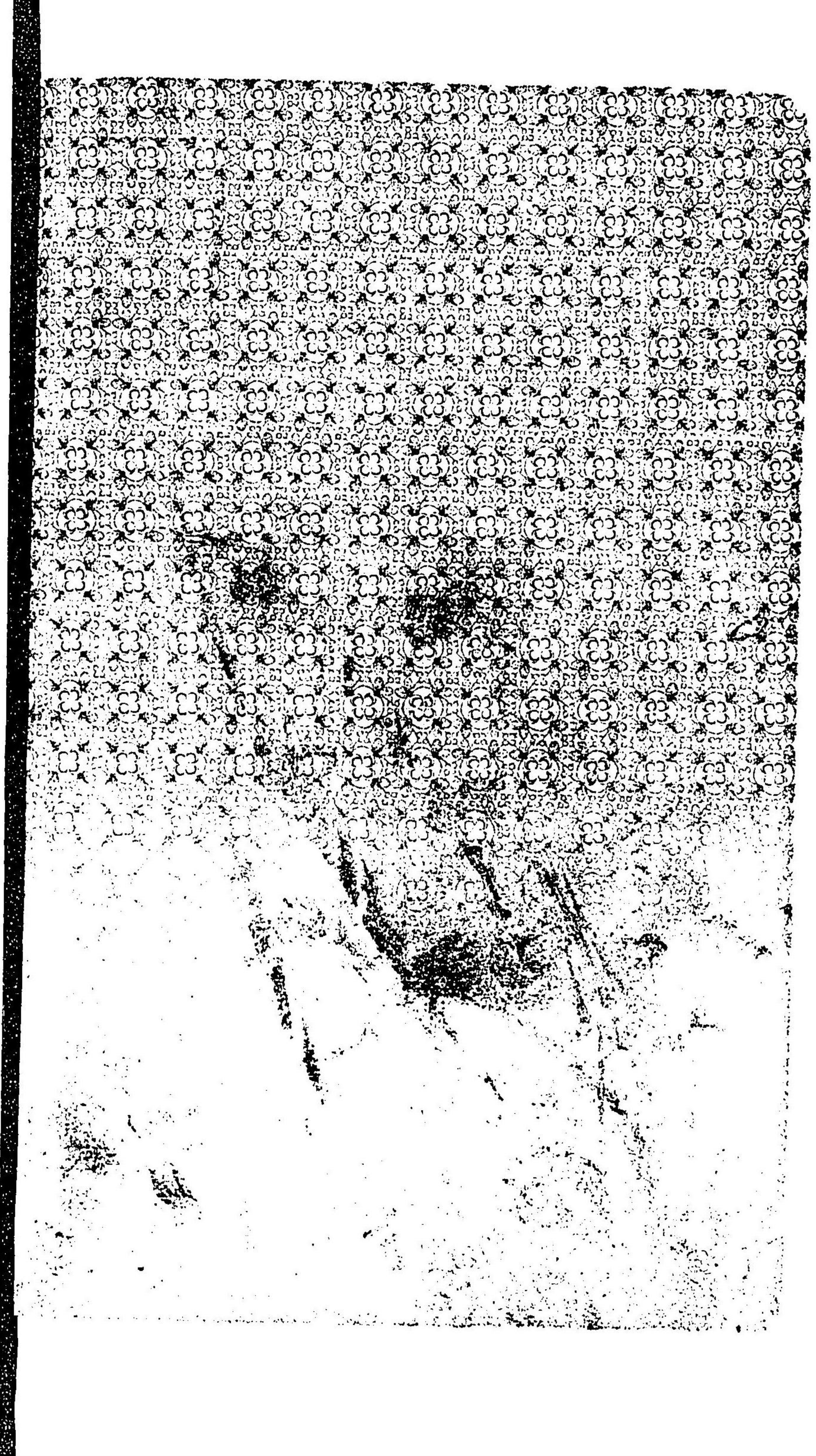
東京市日本橋區新右門町十番地

印刷所 町田活版所

全所

發賣元 扶桑堂

全所



162
1041

日清開戰滑稽劍舞

上海
發行

074706-000-2

特64-375

日清開戰滑稽劍舞

骨皮道人/著

M27

CEJ-0294

